

武蔵野日曜集会

空なる墓

——ヨハネ伝第19章31節～20章10節——

1985年3月17日

小池辰雄

預言の成就 彼らは未だ悟らざりしなり 新しき墓 絶対の有 空なる墓はキリストの気で充滿していた

【ヨハネ19・31～20・10】

31 この日は準備日^{そなえび}なれば、ユダヤ人、安息日に屍体^{しかばね}を十字架のうえに留めおかじとて（殊にこの度の安息日は大なる日なるにより）ピラトに、彼ら脛^{はざ}をおりて屍体を取除かんことを請う。32 ここに兵卒ども来りて、イエスとともに十字架に釘^つけられたる第一の者と他のものとの脛を折り、33 而してイエスに来りしに、はや死に給うを見て、その脛をおらず。34 然るに一人の兵卒、鎗^{やり}にてその脅^{わき}をつきたれば、直ちに血と水と流れいづ。35 之を見しもの証をなす、その証は真なり、彼はその言うことの真なるを知る、これ汝等にも信ぜしめん為なり。36 此等のことの成りたるは『その骨くだかれず』とある聖句の成就せん為なり。37 また他に『かれら己が刺したる者を見るべし』と云える聖句あり。

38 この後、アリマタヤのヨセフとてユダヤ人を懼れ、密^{ひそか}にイエスの弟子たりし者、イエスの屍体を取らんことをピラトに請いたれば、ピラト許せり、乃ち往きてその屍体^{しかばね}を引取る。39 また曾^{かつ}て夜、御許に來りしニコデモも、没薬・沈香^{あわせもの}の混和物を百斤^{きん}ばかり携えて来る。40 ここに彼らイエスの屍体を取り、ユダヤ人の葬りの習慣にしたがいて、香料とともに布にて巻けり。41 イエスの十字架につけられ給いし処に園あり、園の中にいまだ人を葬りしことなき新しき墓あり。42 ユダヤ人の準備日なれば、この墓の近きままに其処にイエスを納めたり。

1 一週^{ひとしゅう}のはじめの日、朝まだき暗きうちにマグダラのマリヤ、墓にきたりて墓より石の取除けあるを見る。2 乃ち走りゆき、シモン・ペテロとイエスの愛し給いしかの弟子との許に到りて言う『たれか主を墓より取去れり、何処に置きしか我ら知らず』。3 ペテロと、かの弟子といでて墓にゆく。4 二人ともに走りたれど、かの弟子ペテロより疾^とく走りて先に墓にいたり、5 屈^{かが}みて布の



置きたるを見れど、内には入らず。⁶ シモン・ペテロ後れ来り、墓に入りて布の置きたるを視、⁷ また首を包みし手拭は布とともに在らず、他のところに巻きてあるを見る。⁸ 先に墓にきたれる彼の弟子もまた入り、之を見て信す。⁹ 彼らは聖書に録したる、死人の中よりその甦えり給うべきことを未だ悟らざりしなり。¹⁰ 遂に二人の弟子おのが家にかえり。

● 預言の成就

³¹ この日は準備日なれば、

ということは、安息日の前の日ということ。金曜日です。

ユダヤ人、安息日に屍体を十字架のうえに留めおかじとて（殊にこの度の安息日は大なる日なるにより）

というのは、過越の祝いの間にはさまっているから。

ピラトに、彼ら脛をおりて屍体を取除かんことを請う。³² ここに兵卒ども来りて、イエスとともに十字架に釘けられたる第一の者と他のものとの脛を折り、

残酷なことをするものだね。まだ死に切らないと、こういうことをするらしい。

³³ 而してイエスに來りしに、はや死に給うを見て、その脛をおらず。³⁴ 然るに二人の兵卒、鎗にてその脅をつきたれば、直ちに血と水と流れいづ。

医学的にいうと——私は必ずしもそれに賛成できないんだけど——

「槍の突いた角度によって、水が出るということは、そんなに十字架は高くなかったということが医学的に分かる。キリストの十字架は割合に低いものだった」

というようなことを脇坂先生が書いている。

ギリシア・カトリックの聖者の、エーゲ海のある島に立てこもっていた人らしいけれども、その人が死んでも、死体が硬直しない。温かい。そして、水が流れていたという——キリストが、

「その腹より水が湧き出る」

と言う——これは医者が見た。相手は亡くなっている人ですよ。しかし、非常に霊的な人物だから、その近くに行くと、盲者の目が開き、跛者が立つという奇蹟が起きた。キリストと同じだよな。これは医者が立ち会って驚いた。聖霊の次元がいかに凄いものだということは普通の想像ではわからない。私はバカだから、聖書に書いてあるとおりに信じている。

³⁵ 之を見しもの証をなす、その証は真なり、彼はその言うことの真なるを知る、

これ汝等にも信ぜしめん為なり。

これはヨハネがちゃんと近くについて、見て知っているんです。そういう意味で、ヨハネ伝というのは霊的であると同時に非常に現実的であるということが学問的にも分かってきた。



私は、いわゆる学問的ということとはあまり好きではない。聖書の世界は、いわゆる学問的なんてなことで結論のつくような世界ではないから。

³⁶ 此等のことの成りたるは『その骨ぐだかれず』とある聖句の成就せん為なり。

みんなこういうように、旧約の預言の成就だということをしきりに福音書では言っている。これは出エジプト記12章46節です。

「過越の祝いのときには骨を折ってはいかん」

ということが律法の中にある。

³⁷ また他に『かれら己が刺したる者を見るべし』云える聖句あり。

これはゼカリヤ書12章10節。復活のキリストにも、あるいは再臨のキリストにすらも、この傷跡があるということも言われてますね。贖いの印です。

●彼らは未だ悟らざりしなり

³⁸ この後、アリマタヤのヨセフとてユダヤ人を懼れ、密にイエスの弟子たりし者、

「アリマタヤ」はアフリカの北の方です。これはサンヘドリング（宗教会議所）の議員の一人だったそうです。

イエスの屍体を引取らんことをピラトに請いたれば、ピラト許せり、乃ち往きてその屍体を引取る。³⁹ また曾て夜、御許に來りしニコデモも、

これはヨハネ伝の始めの方に出てましたね。夜ひそかにやって来て、キリストと問答したあのニコデモです。あれもサンヘドリングの会員です。むしろ少し上の方の人です。

没薬・沈香の混和物を百斤ばかり携えて来る。

イエスの柩にこれを入れるわけです。ところが、イエスには柩は要らないんだ。

⁴⁰ ここに彼らイエスの屍体を取り、ユダヤ人の葬りの習慣にしたがいて、香料とともに布にて巻けり。

ラザロみたいにしたらわけです。

⁴¹ イエスの十字架につけられ給いし処に園あり、園の中にいまだ人を葬りしことなき新しき墓あり。⁴² ユダヤ人の準備日なれば、この墓の近きままに其処にイエスを納めたり。

1 一週のはじめの日、

即ち、今我々がいうところの日曜日です。金曜の次の次の日。金曜から数えて三日目。

朝まだき暗きうちにマグダラのマリヤ、

「マグダラのマリヤ」というのはいつも最初に出てくるね。キリストに非常に救われた女性です。まあ画家がいろいろに書いてます。

墓にきたりて墓より石の取除けあるを見る。



キリストが慕わしくてしょうがないわけです。

²乃ち走りゆき、シモン・ペテロとイエスの愛し給いしかの弟子

ヨハネのこと。

との許に到りて言う『たれか主を墓より取去れり、何処に置きしか我ら知らず』

誰かが持つていつてしまった。確かにここに葬ったのに、どうしてしまったのだろうか。

³ペテロと、かの弟子といでて墓にゆく。⁴二人ともに走りたれど、かの弟子

ペテロより疾く走りて先に墓にいたり、

「かの弟子」はもちろん自分ということ、ヨハネです。ヨハネ伝は自分のことをみんな三人

称で書いている。

⁵屈みて布の置きたるを見れど、内には入らず。

何となく入れなかった。

⁶シモン・ペテロ後れ来り、墓に入りて布の置きたるを視、⁷また首を包みし

手拭は布とともに在らず、他のところに巻きてあるを見る。⁸先に墓にきたれ

る彼の弟子もまた入り、之を見て信ず。

「信ず」というのは、墓がとにかく空っぽであるということを受けとったということですよ。

復活を信じたのではない。

⁹彼らは聖書に録したる、死人の中よりその甦えり給うべきことを未だ悟ら

ざりしなり。

復活なんて思わない。とにかく、いないということを感じたという妙なななしだ。復活と

いうことはもうさんざん聞いているのに、キリストは三日目に甦えることは使徒たちに語っ

ているのに、使徒ヨハネもダメなんだよな。

¹⁰遂に二人の弟子おのが家にかえれり。

正直にそのまま書いてある。

●新しき墓

これはもちろん、他の福音書に並行の記事があります。ルカ伝は23章49節から、マルコ伝は15章40節から。マタイ伝は27章55節あたりから。マタイ伝では、

「⁵⁵その処にて遙かに望みいたる多くの女あり、イエスに事えてガリラヤより

従い来りし者どもなり。⁵⁶その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフ

との母マリヤ及びゼベダイの子らの母などもいたり。」(マタイ27・55～56)

と。マルコ伝15章だと、

「⁴⁰また遙かに望み居たる女等あり、

恐いからね、なんとなく。みんな「遙かに」と書いてある。

その中にはマグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ及びサロメなど



も居たり。

そういう悪いのもいたんだな、サロメなんてのが。

41 彼らはイエスのガリラヤに居給いしとき、従い事えし者どもなり。此の他イエスと共にエルサレムに上りし多くの女もありき。」(マルコ15・40～41)

女性の方が多かったらしいね。ルカ伝の方は23章、

「49 凡てイエスの相識しるべの者およびガリラヤより従い来れる女たちも遙かに立ちて此等のことを見たり。」(ルカ23・49)

と。まあ、似たりよつたりの記事ですけれども。マタイ伝27章、

「57 日暮れて、ヨセフと云うアリマタヤの富める人きたる。彼もイエスの弟子なるが、58 ピラトに往きてイエスの屍しかばね体を請う。ここにピラト之を付すことを命ず。59 ヨセフ屍体をとって淨き亜麻布につつみ、60 岩にほりたる己が新しき墓に納め、墓の入口に大なる石を転まろばしおきて去りぬ。」(マタイ27・57～60)

マルコ伝の方だと15章、

「42 日既に暮れて、準備日、即ち安息日の前の日となりたれば、43 貴き議員にして、神の国を待ち望める、アリマタヤのヨセフ来りて、

ここに「議員」ということがちゃんと書いてあるね。

憚はばらずピラトの許に往き、イエスの屍しかばね体を乞う。44 ピラト、イエスは早や死にしかと訝いづかり、百卒長を呼びて、その死にしより時経しや否やを問い、45 既に死にたる事を百卒長より聞き知りて、屍体をヨセフに与う。46 ヨセフ亜麻布を買い、イエスを取下して之に包み、岩に堀りたる墓に納め、墓の入口に石を転まろばし置く。」(マルコ15・42～46)

ルカ伝23章50節、

「50 議員にし善かつ義なるヨセフという人あり。51 ——この人はかの評議と仕業くみとに与せざりき——ユダヤの町なるアリマタヤの者にて、神の国を待ちのぞめり。

この人はやつぱりちよつと違うんだな。

52 此の人ピラトの許にゆき、イエスの屍体しかばねを乞い、53 これを取りおろし亜麻布にて包み巖いわに鑿ほりたる、未だ人を葬りし事なき墓に納めたり。」(ルカ23・50～53)

●絶対の有

今日の題は、「空なる墓」という。キリストの預言にもかかわらず、みんな復活ということとは思わなかった。それはまあ、ある意味においては当然でしょうね。そういうことは未



だかつてないんだから。ただ、キリストは死人を、ラザロを甦らせた。そういうことも知っているわけけれども。いわんや「キリストは甦る」ということを本当は理屈からいつたつて、考えられるわけです。けれども、それを本当に受けとつて、

「ああ、キリストは甦ったんだ」

ということを誰も言わなかった。それくらい、キリストの復活ということは全く驚天動地の新しい事実である。

墓が空つぽだ。それで、

「誰かが持つていつてしまったんではないか」

と、そのような想像なんだ。誰かが持つていった、連れていった。実はそれは神さまだ。神さまの力。本当はもうそこにキリストの勝利の徴が、この

「空つぽである」

ということに本当はあつたわけです。それから、天使が現れて云々ということはその次に出てきます。

それで、私はここに「空」という字を書いた。キリストの屍は無い。これも「無」です。この空や無は、実は感覚の上では全く空であり無である。我々の五感の上では空しいし、無い。ところが、本当はそれは「絶対の有」なんです。絶対の有。キリストの死は、生に転換するところの死なんです。

この有は――あなた方、空気が見えるかね――空気は見えない。空であり気である。「空気」とは素晴らしい言葉だな。空にして気なるもの。空気は誰も見えない。無色透明。空気は見えないけれども、充滿していることは、我々が空気を吸つていてわかる。空気で肉体は生かされているからわかる。姿がなくて、実は一番あるもの。一番我々に接触しているもの。いや実に我々の中に入つて、血をきれいにしてくれているもの。それがもう空じゃないですか。気じゃないですか。空気というのは素晴らしい言葉だね。充滿している。

キリストの存在は、後では復活体として見えましたよ。見えてきたけれども、あの現象は、あのキリストの復活体の現象は、実は根源的には見えない有なんです。絶対の有です。だから、遍在、貫在、超在、内在、自由自在なんです。戸が閉まつていても入つてきた。まあとても我々の想像を絶する本当の實在、実存です。それが、ある時には現象してはつきりと見えてくる。

「私は幽霊じゃないよ。お魚があるか。食べるぞ」

と。キリストは食べた。ルカ伝の後に書いてある。

「これは宗教物語だ」

と、たいてい普通の神学者もみんなそれくらいにしか思わない。物語ではない。事実です。本当に在るものは根源的には空の姿です。あるいは無の姿です。それを我々に一番表わしてくれるのがこの空気なんです。空であり気である。気は風であり、また霊である。

だから、我々の体は、霊のことと肉のことは実は渾然こんぜんとしているわけだ。



「最後には霊体あり」

とパウロが言ったのはそのことです。決して魂は裸ではない。ちゃんと霊体を持っている。ダンテが『神曲』の中でときどきそのことを書いてますけれども。まあそこまで来ないからね――「来ない」と言ったらおかしいけれども――信仰の本当の強さが出てこない。そういう、空とか無とかいうものは実は絶対の有です。有と無の、相対の無でもなければ、相対の有でもない。この空も無も有もみんな相対概念ではない。これは絶対概念です。墓が空しくあった、なにも無かったということは実は、キリストはすぐそこに現れることができる。そのことは復活節のときにお話しますが。

●空なる墓はキリストの気で充滿していた

私たちの神さまがそうだもの。神さまはどこでも、

「父よ、神さまよ！」

と呼べる。それは特に現象しない、いよいよもつて。その現象体はキリストだけでも。神はいわゆる対象的には把握できない。神はいつも「主」なんです。こつちが「客」です。神の方は我々を呼び、我々をつかみ、我々をもたげ、我々を抱く。神はそうにして――我々は感覚的な人間だから――呼ぶよりか仕方がない。そういう超絶の実在の神をキリストは

「父よ！」

と呼んだ。不思議な言葉ですよ、この「父」というのは。人間界で一番頼みになるものは、まあ「父」というわけだね。「母」もまた別な意味で非常に大事なものですけれども。カトリックでは聖母「マリア」ばかり呼んでいるようだけれどもね。非常に具体的に人格的に呼びながら、相手は全く霊的なんです。だから、

「人格であり、霊である」

ということとは離すことができないのが、我々の信仰の、聖書の現実の世界です。この「父」という言葉は躓きになる。仏教的にいうと、

「そんなものは何か神話的だ」

なんて。脱神話なんてなことになってしまう。脱神話ではない。神話的表現でもって素晴らしい霊的な真理が表わされる。

概念でいくら書いてもダメだから、私は詩を書くんです。詩は即ち、そういった具体的な表現でもの凄い現実を表わすから。音楽も素晴らしい。ひとつのものがどうにでもとれる。ひとつの解釈では盛りきれないものが音となる。そういった詩の世界、音楽の世界。あるいは文字でも、彫刻でも、何でもいいですよ。要するにそういったものでもって究極的なものを表わす。これはみんなひとつの徴、暗号なんです。

究極的なものは、それではどうしたらいいか。全存在で受けとるよりかしようがない。



全存在で。それを「体受」、からだで受けとるといふ。

我々は空気を体受しているではないですか。我々が一番体受しているものは空気じゃないですか。そのことが一番素晴らしい真理を実は語っている。我々の魂が、この空と思われるような気、霊を本当に受けとって生きているか。肉体が空気を本当に吸って生きているように、魂が本当に霊を受けとって生きているか。そこに本当の聖霊の現実があるわけです。だから、

「聖霊は何ものとも代えられない」

と言っているのがそのことなんです。魂は神の霊、キリストの霊なくしては、本当は生きていられない。

空なる墓は実はキリストの気で充滿していたんだ。キリストの気で。けれども、それを誰も感じなかった。受けとらない。マグダラのマリヤは慕っていたけれども、そこまでの本当の霊的な慕いではなかった。

「キリストの姿は現れなくても、墓の中にはキリストの気が充滿していた」

私が最後に言いたいのはこのことなんです。どんな註解書にもそんなことは書いてない。この復活のキリストの気が充滿していたんですよ。それが受けとれない。聖霊が来るとやつとそのことが分かってくる。空なる墓ではない。キリストの気で充滿していた墓である。それはそうですよ。キリストが甦ったそのところにキリストの霊気が充滿してなくてどうするんですか。今日のヨハネ伝はそれでお終い。

